

# ケネス・ノクスロス (KENNETH REXROTH) ノ

## みのぶね ハーン (LAFCADIO HEARN) の

田 壴 泰 謐

ケネス・ノクスロス (Kenneth Rexroth) は小泉八雲ハラル  
ラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn) の数多くの著書の  
中から仏教に関するもの十九篇を編集し、序文を書いて *The*  
*Buddhist Writings of Lafcadio Hearn* (『ラフカディオ・  
ハーン仏教著作集』) の題する書物を出版したアメリカの

詩人であった。高木大幹氏はハーンはつぐく詩人だと思  
う。ハーンには、対象の背後にあがぶがとひそむ暗い世界を  
はじきはじく見つめる鋭い眼があった (『小泉八雲』、一一〇)  
と述べている。又田代三千穂氏も、がんらいハーンは詩人的  
な素質をもった文筆家で、形のうえで詩をひとんど書がなか  
つたけれども、本質的にはたえず夢をおうロマンティックな  
詩人であつて、… (一一八) ふ體の様に、ノクスロスもハー

ンの作品と詩的なものを見い出したはずである。ノクスロス  
もハーンも共に彼等の作品を通して東洋文化と西洋文化の融  
合という重要な媒介をした啓蒙家であった。

ノクスロスは芸術的に、及び社会的に反体制、反権力の姿  
勢をたえず保ち続けた。権勢に近づいたれにおもねる」とを  
最も嫌つた道元は、同時にまたいかなる権勢に対してもおそ  
れる」となく法を説き道を語ることをあえて辞めなかつた  
(竹内道雄、二八六一七)。ノクスロスが道元禪師のこの様  
な態度を知つてゐたが、"He denounced Zen as a reli-  
gion of militarists, millionaires, and hippies, but ex-  
cepted Daisetz Suzuki, whom he had met as a boy  
in Michigan, and whom he admired as a creative

ケネス・ノクスロス (KENNETH REXROTH) のみのぶね ハーン (LAFCADIO HEARN) の (田ヰ)

thinker.” (Morgan Gibson, 118) (少年の時、シガーナーの金持、ヒッピーの宗教として非難した) けれども、禅に対する見方は違つたものになつていたかも知れない。

或いは道元禪師の、虚空は虚空なり、四大は四大なり、五蘊は五蘊なり。水流も又かくのんとし、得道はいつれも得道す。ただし、いつれも得法を敬重すべし、男女を論ずるなどなけれ。これ仏道極妙の法則なり。(『正法眼藏』「礼拝得體」、三二一一) をフュミニスト(男女平等主義者)であった彼が読んでいたら、禅にもっと親しむ事が出来たであろう。だが、仏教の經典に精通し、“I am a sort of Buddhist” ともじめな顔をして、いた彼の姿が思いあわれる(児玉実英『英語青年』、三八七) 様に仏教に引かれ、特に真言密教に共感をおぼえていた(児玉実英『研究年報』三十巻、一三八)。

ハーンは一八五〇年、ギリシャのレフカス島に生まれた。父はアイルランド生まれのイギリス陸軍軍医、母はシチリア島の生まれであった。そして一九〇四年東京で亡くなつたが、享年五五歳であった。レクスロスはハーンの亡くなつた翌年、一九〇五年にアメリカ、インディアナ州に生まれている。ドイツ、アメリカンインディアン等の血をひき、父

は薬剤師であり、母は進歩的であった。一九八一年、七七歳の生涯を終えてくる。

高校を退学したレクスロスは “He visited classes at the University of Chicago, but never pursued a degree.” (Gibson, 141) の様に学ぶ事に熱心であつても、卒業証書といふ肩書には関心がなかつたようである。ハーンは一四歳の時、フランスの神学校に入学したらしいが、数カ月で退学し、イギリスのセント・カスバート学校へ転校し、一八歳の時、退学している。レクスロスは一〇歳の時、母を胸の病氣で失い、一一歳の時、父はアルコール中毒で死んだので、シカゴの叔母にひきとられている。ハーンは五歳の時を最後に母に会う事がなかつた。両親の離婚によつて大叔母のもとに引き取られて、いた。

レクスロスは日本と中国文化、特にその仏教的側面が、少年時代より彼の生涯を通じて、その作品と世界にしみこんでいた(モーガン・ギブソン「解説」九七)。ハーンが仏教を学び始めたのは、渡米後シンシナチで新聞記者をやり始めた二五、六歳の頃といわれている(大西忠雄、八五)。

レクスロスは第二次大戦中は、収容所行きとか、その他の民族差別的迫害にあふれていた日本人を助け、すべての戦

争と政治的弾圧を非難した(ギブソン、九七)。戦争する國家は人間を人間として扱わないと叫んだレクベロは第一次世界大戦では良心的非戦者であった(矢口以文、四〇—一)。だから、第一次世界大戦から一九五〇年代にかけてのノクベロスの詩やエッセイの主題は、おもしへ戦時体制批判であった(児玉『英語青年』、三六六)。在米当時、いたるところで黒人の味方をしたハーナ(高木大幹『小泉八雲と日本的心』七四)は来日後、その歴史の軍国主義的風潮に対して強い嫌悪感を覚え、日本人の中にはいた仏教の慈悲の念が次第に薄れつつあるを残念に思っていた。

『ハーナカーティオ・ハーン仏教著作集』に収められた「The Stone Buddha」(「石仏」)は OUT OF THE EAST REVERIES(『東の國から』一八九四)から、「Dust」(「塵」)、「Buddhist Allusions in Japanese Folk Song」(「日本の俗謡における仏教示金」)、「Nirvana」(「涅槃」)、「Within the Circle」(「輪中」)の四編が Gleamings in Buddha-Fields(『仏の畠の輝き』一八九六)から、「A Question in the Zen Texts」(「禪の公案」)、「The Literature of the Dead」(「死者の文学」)、「Of Moon Desire」(「月欲」)の三編が EXOTICS AND RE-

ケネス・ノクベロ(KENNETH REXROTH)によるハーナ(LAFCADIO HEARN)の心(田中)

*TROSPECTIVES*(『異国情趣と回顧』一八九八)から“Footprints of the Buddha”(「仏陀の足跡」)、“Japanese Buddhist Proverbs”(「日本の仏教俚諺」)、の二編が IN GHOSTLY JAPAN(『幽の日本』一八九九)から、“A Legend of Fugen-Bosatsu”(「普賢菩薩のはなし」)、“The Sympathy of Benten”(「弁才の慈心」)の二編が SHADOWINGS(『影』一九〇〇)から、“Buddhist Names of Plants and Animals”(「動・植物の仏教的名称」)、“Beside the Sea”(「海のせらふ」)、“Otokichi's Drama”(「おだるや」)の二編が A JAPANESE MIS-

CELLANY(『日本雑誌』一九〇一)から、“A Drop of Dew”(「露のひとこずやく」)、“Gaki”(「餓鬼」)の二編が KOTTO(『嘲讐』一九〇一)から、“The Introduction of Buddhism”(「仏教の説明」)、“The Higher Buddhism”(「大乗仏教」)の二編が JAPAN(『日本』一九〇四)から集められた。

仏教は、儒者よつてかむに広汎な人間的感化をうけたり「慈悲」による新しさ福音を日本に与えた(「仏教の渡米」十一編、平井昭一訳、一八九一九〇)。ハーナは仏教の慈悲の教へを安心して見ることに入った。

ケネス・レクスロス (KENNETH REXROTH) 『みるるハーン (LAFCADIO HEARN) の心 (田中)

石灯籠の模造や、石のかけらを石塔に見立てた、小さな墓地までできている。みんなして、おとむらいごっこをして遊んでいるのだ。蝶や蟬の死んだのを埋めて、お墓にお経を上げるまねをしている (『塵』『仮の畑の落穂』平井訳、八四)。

子供達が死んだ虫を埋めて、石でお墓をこしらえ、手をあわせて拌んでいる姿にハーンは慈悲の心を学んだであろう。

よく見ると、この仏像は、いまはもう、両手も欠けてしまっている。わたくしは、なんだか氣の毒になってしまって、仏像の額にある、小さなしるしのイボのまわりの苔を、爪でかいてとつてあげたらと思って、手でそれをかいてみた。古い「法華經」の文句をおもいだしながら (『石仏』七巻平井訳、一七一)。

ハーンの伝記、評伝類をひもとけば、必ずといってよいほどにふれてあるのが、草木、虫、小動物への愛であり、人間でも、小さいもの、弱いものに対する温かい同情である (『小泉八雲と日本之心』七二)。レクスロスがつねにひいきにしたのは平和、協調などの側面における日本の美的、宗教的経験であり (ギブソン、九七)、一九六七年に来日してから、亡くなるまで、日本の仏教—慈悲の心—を中心にして詩

作活動を行なった (同、七)。

レクスロスはアメリカ詩の世界においてはコスマポリタン的であり、世界的な視野に立つ詩人であった。ハーンはエヴァジオン (脱出) の作家であつた (谷川徹三、一五一)。イギリスからアメリカに渡り、西インド諸島にも足を伸し、来日後も旅を続けた彼は国粹主義者、保守主義者を寄せつけない自由人である。レクスロスもハーンも共に、人種という血縁関係の枠を越えていた。だからこそ二人共に仏教に関心を持ち、仏教的精神を保ち続けたのがおのずと納得出来るのである。

出家した仏陀は血族的意識の枠を越えていた。増谷文雄氏は何故に貿易商人たちが仏陀に心酔したのかを語っている。遠い海をこえて貿易をいとなんていふ彼らの意識は、まさに国際的でさえあつた。彼らは、うそ、いつわりで広い人間的信頼が得られないことを肌身でもつて体験していたので、仏陀の教え「すべては、もろもろの関係のなかにあって、つねに変化する」教えに心を動かされたであろう (九一一一七)。仏陀の「感官に気をくばり、満足し、戒律をつつしみ行ない、怠らないで、淨らかに生きる善い友とつき合え」 (『アッダの真理のことば・感興のことば』六二一三) とい

う言葉に貿易商人たちは耳を傾けたのである。

レクスロスは祖母からはなれ、父とふたりで、ニムズという家の1階へ移るが、このニムズ家はあるでウェルズの小説からぬけてきたような人たちで、トイレがつまついていても平氣で、ニーチュ、ハーバート・スペンサー、自由恋愛などの問題を語りあうタイプの人たちだった（中山裕、1111）。彼はハーバート・スペンサー等についての議論をおもしろく聞いたであろう。ハーンもハーバート・スペンサーから大きな影響を受けたことは有名である。

自分のことを、ハーバート・スペンサーの学徒であると自称しているものもあるが、わたくしが仏教哲学にロマン的な興味を越えたものを見いだすようになったのは、じつは綜合哲学に親しんだおかげである（「大乗仏教」十一巻、平井訳、110九）。

ダーウィンの進化論を基礎に、十巻からなる『綜合哲学体系』を著したスペンサーはハーンにとって仏教に近づく大きな機縁であった。スペンサーはハーンとレクスロスの共通項であると言えよう。

レクスロスは一九六七年に初めて日本を訪れる前日、すでに ONE HUNDRED POEMS FROM THE JAPANESE

（『日本の詩、百首』一九五五）といふ翻訳詩集等を出版している。その詩集の一番田は山部赤人の歌が訳されている。

I passed by the beach

At Tago and saw

The snow falling, pure white,

High on the peak of Fuji.

Tago no ura yu

Uchi idete mireba

Mashiro ni zo

Fuji no takane ni

Yuki wa furikern

YAMABE NO AKAHITO (111).

この原文は次の通りである。

田児之浦従 打出而見者 真白衣

不尽能高嶺爾 雪波零家留

（『万葉集』、10111）。

犬養孝氏ばの歌について詳しく述べてゐる。その一部を引用してみる。富士山を描くのに、田児の浦といふ近景を置いているんですね。だから相手の景が映発して生きてくるのや。今世だといふ、写真で富士山を写す時に、近景と共に

ケネス・レクスロス (KENNETH REXROTH) ラムジルベー (LAFCCADIO HEARN) のむ (田中)

ケネス・ノクスロウ (KENNETH REXROTH) 『みるくべー』 (LAFCADIO HEARN) の (田井)

写すでしょ。それと同じですよ。「田児の浦々」と、う自分  
の立って居る場所を必ず詠つたかい、向こうの富士山が、グ  
ーッと生れてくる。しかも、それに「真白にそ」、といふ強  
めがある。それが弾力なんです。そこにベネが入つてゐる。

「真いぬに、まあー」と。だからそれが最後に落ちつゝと  
いふは「不尽の高嶺に雪は降りける」というなるんです。そ  
れで本当に躍り出でてくる歌となる。これは、山部赤人が、創  
作意識をみじと驅使した立派な歌ですね (一八二)。

因にこの詩集でノクスロウは松尾芭蕉の句「古池や蛙飛び  
いぬ水の音」を詠してゐる。

An old pond—

The sound

Of a diving frog

BASHŌ (一八二).

くー／＼の句を詠してゐる。

Old pond—frogs jumping in—sound of water.

(EXOTICS, 1 大図).

マックス・ノーラーの編纂した浩瀚な「東方聖典叢書」

や、ビルブルの仏典のフランス訳などが世に出だしたの  
は、やがて十八年のノーラー・ホーリング時代にあたります  
(井口 1, 111—11)。この頃には豊かなムルの給料をつ

きんで、東洋関係の書籍を購入してゐる。彼が読破した仏  
教関係の資料は相当多数に上つてゐるが、その主なものを次  
に挙げてみると

- (1) マックス・ミュラー (M. Müller) の東洋古代の經典類英  
訳叢書「東洋の聖典 (Sacred Books of the East)」就中  
「仏教の聖典」 (Sacred Books of the Buddhism)。
- (2) ハリー・オルコット (H. Olcott) の「仏教問答」 (Bud-  
dhist Catechism) (大もく) は後に本書をえせ佛教へ改  
してゐるが)。

(3) スペンス・バーク (S. Hardy) の「仏教提要 (Manual  
of Buddhism)」 (新) の權威ある仏教解説書)。

(4) エンスナード (E. Snard) の「仏説仏說考」 (Essai sur la  
Légende du Bouddhisme) (比較宗教学により仏教進化を  
跡づけたもの、尤も) の著者は仏陀の実在を否定して問題を  
起したが仏教書として西欧で名著と評價される。

(5) ウォレン (Warren) の「英訳仏教 (Buddhism in Trans-  
lation)」。

(6) サムエル・ビール (S. Beal) の「浪漫仏説 (Romantic  
Legends)」その他。大体一八八〇年以後、彼の研究の対象  
は、アーリヤ (波羅門教) からブティバム (仏教) に移

り、専ら後者の方に集中しだしたこと、その理由はハーンが英詩人E・アーノルド(Edwin Arnold)の仏陀の生涯を歌った叙事詩「アジアの光」、別名大出家(The Light of Asia, or the Renunciation)(一八七九)を一読したためだと述べる。そして来日後、仏教学者黒田真洞の「大乗仏教概論」(マヤ)はハーンの仏教研究を進めるのに与つて力があったようである(大西、八八一九三)。

レクスロスは満州事変から第二次世界大戦にかけて、冷えきつてしまつた日本文化にたいするアメリカ人の関心を、なんとか保ちつづけ、それを新しい価値感の源泉として再解釈し、戦後の世代にバトン・タッチした重要な詩人なのである。その意味で、彼の戦中から戦後にかけて果した役割はさわめて大きい(児玉『研究年報』二九巻、一八二)。東洋と西洋の懸橋になつたハーンの訪日においていた大きな期待の一つが、仏教の研究におかれているらしい(大西、八五)ことをレクスロスは見抜いていた。従つてレクスロスの編集した『ラフカディオ・ハーン仏教著作集』は新しい装いを呈して、ハーンとレクスロスの二人の思いが込められた書物であるといえよう。

この『仏教著作集』の中に「動・植物の仏教的名称」が収

められている」とは先程述べた。これを読むと、ハーンが動物につけられている仏教的名称を精しく調べていることがわかる。

カッコウの一種で、日本の詩人がむかしから大いに賞揚しているホトトギス(学名ククルス・ホリオセファルス)の仏教的名称だ。それはムジョウドリ(無常鳥)というのである。この名前は、この鳥の鳴き声の「ホンゾンカケタカ(本尊掛けたか)」からきているのではないようだ。「本尊とは、この鳥が毎年出てくるわよつと前の四月八日の灌仏に、ほうぼうの寺でかける仏陀の聖画のことである。」

(九巻、平井訳、四七九)。

日本人がホトギスを「無常鳥」と呼び、その鳴き声を「本尊掛けたか」と聞いているのを見ると、当時の人々の想像力に溢れた心が思い起されてくる。それと同時に来日前、ハーンが住んでいたアメリカ南部に日本の安物の扇子がもうすでに輸出されていた。"Cheap fans!"と行商人が呼び声を立てると、その声がハーンの耳には実際、"Jap-ans!"と叫んでいるように聞え、また、"Chapped hands!"と叫んでいるようにも聞えた。安物の扇子「チープ・ファンズ」が「ジャ

ケネス・レクスロス(KENNETH REXROTH)とみられるハーン(LAFCADIO HEARN)の心(田中)

ケネス・ノクベロウ (KENNETH REXROTH) ラフカディオ・ヘーン (LAFCADIO HEARN) の詩 (田井)

「・ア・ン・バ」日本、と聞いたら、「チャ・ア・ン・バ」おかあさん  
の声、と聞いたら、「チャ・ア・ン・バ」ふくらの声ね。やがて「一ノ谷」実

隸に日本に行く九年も前のころや、極東行きのころだといふ  
夢にも飛べただけた曲題である (丹三松風、大1〇)。く  
ーんも又想像力豊かな耳を持つて、聞くおふねの声ね。

ハタハタ THE MORNING STAR (『墨暉』167  
九) しの 詩集があふ。“Rexroth named *The Morning*  
*Star after the planet that shines forth just before*

*sunrise, a symbol of enlightenment ever since Shakyamuni observed it under the Bo tree about twenty-five centuries ago. The book is the culmination of the poet's lifework and his absorption of Buddha Dharma ever since he had begun translating oriental poetry as a youth* (Gibson, <1>).

チャ・ア・ン・バの詩集の題名は釈尊が迦提樹の下、明  
星を観て悟りを悟ったと云ふ、その明星にゆたんだゆゑで  
かひねたところ。咸しが、ノクベロウの尊敬ある詩譯論語十  
の譯写した雑誌『昭暉』からの詩集のタイトルなどだと  
ある (チャ・ア・ン・バ 1〇1)。

この詩集の “The Silver Swan” ふくらの詩の XIV は長

ヌヌサバの歌ふ聲の声。

Hototogisu—*horobirete*

The cuckoo's call, though  
Sweet in itself, is hard to  
Bear, for it cries,

“Perishing! Perishing!”

Against the Spring. (14)

おふくたかふと  
たゞがたこ  
せひるねー せひるねー  
と春をやめたりゆかみ

(『心の庭やの他』古樺ハベル詠、410)。

ノクベロウはホーリーキーの聲や祖を「滅ぶおと」と聞くじ  
る。その鳥は感ふるゝ響かを感じ取る心だ、古来日本人が  
その鳥を無常鳥と呼んで心の世間として見て來る。

同じ詩集の “The Love Poems of Marichiko” ふくら  
の詩の LIV はホーリーキーの遊場や。

Did a cuckoo cry?

I look out, but there is only dawn and

The moon in its final night.

Did the moon cry out

Horobirete! Horobirete!

Perishing! Perishing! (十四)

せふふわ壁ふたか~

見てみねば だだ夜明かん

最後の夜の月

月が鳴いたか

ほろびねて ほろびねて と

(『摩利支子の愛の歌』 片桐訳)。

「一」は無常につぶやくべきこと。

意識ある「我」が無常であるところ教義は、仏教哲学の

なかでもいふも頗著な教義であるばかりでなく、これはまた道德の上からいへ、いふも重要な教義である

(『聖潔』『仏の煙の落穂』、110大)。

シカベロクな別の語やなセムギスの曲を「華嚴経」と題してゐる。

THE FLOWER SUTRA

Deep drowsy shade under the broad leaves,

The dusty plain far below dim with haze,

ケネス・レクスロー (KENNETH REXROTH) 著 まみねー (LAFCADIO HEARN) 等 (田中)

Picking flowers—bush clover, gold banded lily,  
Bell flower, wild pink, while a mountain cuckoo  
Flutters about, watching me and crying,

"Kegonkyo."

(*New Poems*, 114).

広葉樹に覆われ らぶく物憂い影  
さるかトの挨へばく露で霧む平地

花を摘みつゝ一萩、女郎花、  
桔梗、撫子、そしてホトトギスが

ぱたぱたと蝶を舞い、私の方を見て囁へる

「華嚴経」

(拙訳)。

坂本幸男氏は華嚴經即ち「大方広仏華嚴經 (mahā vai-pūya buddha gāndavyūha sūtra)」といふて次の様に語つてゐる。大方広とは、広大無辺なものという意味であります。存在するもののすべてを一纏めにして大方広と名づけたのであります。次に華嚴といふのは、華で莊嚴すぬという意味であります。花が咲けば実がなりますように、菩薩の修行といふ花で飾れば、必や仏果といふ実がみのる」とを喻えたりあります。ありますから、大方広仏華嚴経といふのは、仏さまのものであるが、又その仏にはどうしたら

ケネス・レクベロウ (KENNETH REXROTH) ラフカディオ・ヒーン (LAFCADIO HEARN) の詩 (甲)

成れるが、山の川とを教えた教典であつた。華厳經によれば、大陸に浮く丘と雲と、青田を回る緑の風と、鶴と飛ぶる小鳥と、小川に遊ぶ魚と、天地万物など一の心と云うなしのなまのやありか (甲一九)。

「一」は「日本の仏教理論」の因九番田やホーティヤベに詠やるゆのを挙げて、  
ルルリハ山豐へせ山田のせんじや

父と山をあひて山と山をあひて

The bird that cries korokoro in the mountain rice-field

I know to be a hototogisu;—yet it may have been my father; it may have been my mother. (乙)

平井詠、一四一

「」の歌には體も人間も一体になつた妖精のが現れて、  
る。シカベロウの讃 “THE HEART'S GARDEN THE GARDEN'S HEART” (『心の庭・庭の心』) は *The Collected Longer Poems of Kenneth Rexroth* (一九六八) に収められた (乙後 CLP 附録)。心の讃の最後の心の讃はホーティヤベが贈歌である。

In the warm night cold air drains

Down the mountain stream and fills

The summer valley with the Incense of early Spring. I

Remember a grass hut on

A rainy night, dreaming of

At the cry of a mountain cukoo. (IIIOII)

ぬだたかゝ夜 鳥歌が

山の流おやわやおん

夏の谷をみたす

早春のかおり。おゆふだす

草の庵

夜の夜、むかしを

おゆふ、山ホーティヤベの祖に  
涙ながらしてやめか

(『心の庭』片桐詠、五二)。

ホーティヤベの祖に仏の祖や父母の祖を聞く心をシカベロウの讃やバーンの文章から学んでいたが出来た。  
バーンからの體を祖が「仏法僧」としていたとしている  
ルルの心、仏法僧の名づけられた體や、その體を祖が「慈

「懸心」の如きは、やや離れた鳥の鳴き声だ鳥といふ  
ても説明してしまふ。そして今でも一番美しい祖や鳥へ鳥とい  
て人々が心懐かしいからグレイスの「ヒトツムツヅクヒナ」。  
この鳥は「金法蓮華經」の略称「法華經」からアサヒを發  
声するので有名である。

シカベロウの體のウグイグの聲に似る。

Smoky, oppressively hot,

The evening comes to an end.

An uguisu sings in the gnarled pine.

The cuckoos call in the ginko trees,

Just like they do in the old poems (CLP, 114).

かやんじ、へだくもへと顎こ  
夕方が終る。

ウグイグがねじれた松や櫻の  
ホトトギスが銀杏の木や崖

のなれやくふねくらひの聲に似る。(釋詁)

カグレイスは「慈撫經」の聖歌、ホトトギスは「華嚴經」の  
聲。心かゆの聲の如きの声がどうも。たのむ愛い声の如きは人  
の心地の如い。

The bush warbler sings in the

ケネス・シカベロウ (KENNETH REXROTH) 著ラフカディオ・ヘーン (LAFCADIO HEARN) の心 (田中)

Ancient white pine by the temple  
Of the Buddha of Healing (CLP 114).

ウグイグがいたい。

古の白松の聲。

の薬壺の声。(『心の趣』止禪記、114)

ウグイグは松の様に育えて生れるといふを教へておる。そ  
して病んでしの私達を癒すために薬壺を用意してしる薬壺如  
来の聲である。

Late Spring.

Before he goes, the uguisu

Says over and over again

The simple lesson no man

Knows, because

No man can ever learn (The Morning Star, 111).

春たまし、

行へおへだ ウグイグ

は、かんだんなおしえを  
へりかえすが、だれも  
知らぬ、だね。

新しく見る声。(『心の趣』止禪記、114)。

ケネス・ルクベロス (KENNETH REXROTH) ラムズレー (LAFCADIO HEARN) の詩 (田井)

カグヤベサ「延暦寺」を語へむが、現世人はやおを語へ  
叶ふ持たざへたいたのやあいか。しかしやおやめこりかは  
心のア羅シトベスルムを語る「延暦寺」を歌ふ續ひの  
やあ。

更ニシタベロベの盡や千疋の「羅袖」も盡へのやあ。

After a long time walking

Up and down the long hall

And looking at the thousand

Kwannons through the incense smoke

And candle light I realize

That each one looks different.

The curve of the lips, the regard

Of the eye, is never quite

The same, never exactly the same

Gesture of the blessing hands.

He who hears the world's cry.

Thirty three thousand thirty three

Heads, each with a hundred arms

And eleven faces.

Unalike.

Chidori, chidori, crying  
Kannon, Kannon, Kannon, Kannon  
(CLP, 11号 | -1|).

チドリと叫ぶ  
千の觀音を

香の煙をくねーと  
ローハクの光で見ながら

それがおやがうのがわかった。  
へゆるぬの曲縫、  
おだれー、だ、むーと  
おなじぢばなし、かーとやうだー回の  
祝禪の手ひねだー。

冉の辻や根を闇へらぶ。

三三万三千十  
の頭と、やねやみの手の手  
三十一の頭がへべ  
ほんじなー。

チドリ、チドリ、聲こじる  
カノハノ、カノハノ、カノハノ、カノハノ  
カノハノ、カノハノ、カノハノ、カノハノ

(『心の庭』片桐訳、三一)。

世の苦しみを聞いてくれる觀音様が各々違つた表情をして  
いる様に、「觀音」の聲をしたるはやである。燒津でお施餓鬼会の  
法養を観たハーンが、

ついに「施甘露」の陀羅尼をくりかえし唱える。この功  
徳によつて、供えた食物が諸靈のために、天土界の甘露  
と飲食に変わるのでそだだ(「海のほとり」九卷、平井  
訳、五九一)。

と述べてゐる様に、觀音様の聲も千鳥の「觀音」の聲も甘露  
の法體となるはやである。

Three red pigeons on the sunbaked

Gravel, murmuring like the

Far off voices of people

I loved once. (CLP, 一九四)

〔〔國〕の赤いくつが日焼けした

砂の上や、ひゞめじてるのは むくらぶ

かづくわたしが愛した

ひゞむの聲が遠くからまいへるよへだ

(『心の庭』片桐訳、三一)。

ケネス・ムクベロウ (KENNETH REXROTH) ふみふねべー (LAFCADIO HEARN) の心 (田中)

ひとごとの聲はおたがいがつながつていることを暗示して  
いる。それは世界の連鎖であり、循環である。ハーンは循環  
について自問自答している。

『循環』とは、ほかでもない、生と死の大それなまほろし  
の渦のじゆだ。無知無智の衆生は、おのれの妄念懈行の  
ゆえに、みなその渦の中に沈湎しているのだ。しかも、  
この渦は、『世』の中じゆである。そして、その『世』  
なるものが、おぼれしなのだ

(「釋子訳」『仏の煙の落穂他』平井訳、一五六)。

As the full moon rises

The swan sings

In sleep

On the lake of the mind. (The Morning Star, 四)

鴨川がのぼり

白鳥がうだら

夢のなか

ここひの湖上 (『心の庭』片桐訳、五八)。

ムクベロウの詩の中にある様に白鳥がうだらのゆ夢おぼれ  
しだらうが。ハーンは宇宙につれて

宇宙おぼれの大あなたせんは、分解と進化の交代以

ケネス・ノクスロス (KENNETH REXROTH) ラーフカーハー (LAFCADIO HEARN) の心 (田中)

上のものである。それは無限の変形であり、不斷の転生  
である（「塵」平井訳、八八）。  
と述べる。

Altair and Vega climb heaven.

Across the Milky Way the Eagle

Plays the Lyre with his rays. (CLP, 1100)

牽牛と織女が上へられた。

天の川をひいてワシが  
光線をもって琴をかなでる。

(『心の庭』片桐訳、四八)。

鶴が天の川を飛び越え、光線をもって琴をかなでる如く鳴  
くのはスケールが大きい。それはまるでハーンが仏教の宇宙  
観の広大さに驚いたがそれに近い。ハーンは次の様にいう。  
わたくしがはじめて仏教史の概略を知らうと思つた時、  
とくに深い感銘をおぼえたことが一つあつた。それは何  
かといふと、仏教の宇宙観のじつに洪大無辺なことであ  
つた（平井訳「日本の俗謡における仏教引喻」『仏の畠  
の落穂』一九一）。

ハーンは「虫の音楽家」と題して、松虫、鉢虫、織蟲  
(あづれこ)、鷗邊虫 (アツカムシ) 等のひびだけでな

く、秋と日本人との深いつながりについても語っている。

日本の詩人は、古来、秋という季節のかもす真のやるせ  
なもといふものに不惑症ではなかつた。——遠い祖先の  
人たちが胸をいためた悲しみが、年とともによみがえつて  
くる、あのふしきな悲愁の思い、無量無尽の記憶の底に  
ある悲しみをおぼろげながら受けついできた、それが幾  
百万年といふあいだ、夏が終るのといふしょによみがえ  
つてくるのだ。だが、この愁思、このやるせない思いを  
人が口にするとか、それはほんどいつも型のひとく、  
別離の歎きに通じている。秋には色彩のうつろいがあ  
る。木の葉が散る。虫の声の妖しい哀哭がある。秋は仏  
教が説く無常を、会者定離を、五欲にのきまとう煩惱  
を、そして孤独の寂しさを象徴している。わずか一匹の  
コオロギのあの素朴な歌声に、やせしい繊細な空想を、  
夢の国のようにゆづらつと呼び喚めすことのできるよう  
な國民から、われわれはまさに何物かを学びしのなけれ  
ばなるまい（『仏の畠の落穂』平井訳1111—11）。

ノクスロスに虫の詩がある。

*Tsukutsukuboshi*

In the month of great heat

The first bell cricket cries.

"It is time to leave." (*The Morning Star* | 4).

シクシクボウシ

露葉の月

あら鉢虫がなべ

「行かなへだな」(『心の庭』片桐訳、71)。

蟬の仲間では一縞最後に現はれぬ、シクシクボウシの聲を  
眞を「シクシク法師」と書く人は聞こだ。法師とは仏教によ  
く通じ、その教法の師となる者であり、僧の別名である。蟬

の聲を眞にも仏教的味わいを見い出した。その蟬をレク  
ベロスは日本名のまま用いている。その詩の中で秋の虫、鉢  
虫も登場する。ローハ、コーンル(燐を照る音色)を奏でる鉢虫  
を、レクベロスは "It is time to leave" と聞いている。

リーンル(鳴る聲)を "Leave" (ラーハ「去る」)と聞えたの  
である。そして「行かなへだな」もこの聲を眞と、夏の終  
りを告げるシクシクボウシと、秋の虫、鉢虫の対置によって  
無常感が醸し出されている。大町氏は、腹部に張りねてある  
声帯を振動させる蟬をウーカリスとし、そして一枚の前翅  
を劇しく擦り合わせて奏でる秋の虫をヴァイオリネットに譬  
えている(八五)。ヴァーカリスとヴァイオリネットによ

る音樂は物悲しきを表す、恋の歌である。

Night without end. Loneliness.

The wind has driven a maple leaf

Against the shoji. I wait, as in the old days,  
In our secret place, under the full moon.

The last bell crickets sing.

I found your old love letters,  
Full of poems you never published.

Did it matter? They were only for me

(*The Morning Star*, 81).

おわりな夜 めるゝや  
風がたたかひたる あみじの葉を  
しょうじん。おたしなまき 曲のよみ  
秘密の場所で 満月の下  
めるゝのシクシクボウシが鳴く  
むかしの恋人が出ていた  
あなたの未発表の詩がこゝに  
いひじょく? もうやわたしなづれただんだから  
(『摩利支子の愛の歌』片桐訳)。

ケネス・ムカベロス (KENNETH REXROTH) による「Lafcadio Hearn」の心 (田中)

ケネス・ンクスロス (KENNETH REXROTH) 『みるまくー』 (LAFCADIO HEARN) の心 (田中)

恋ある熱情の叫びである (大町、八五)。ベーンはツクツク  
ボウシの鳴れ声を故郷を恋しく思へ歌として聞こえていた日本人  
人がいたりと紹介している。

ツクツク、ヨイシとして鳴くのだとじう人もある。むか  
し、筑紫 (九州の古い名) の男が、古里遠く離れて病氣  
になって死んだといふ、その男の魂が秋蟬になって、そ  
れがツクツク、ヨイシ、ツクツク、ヨイシ、として、間が  
なすきがな鳴くのだ、という伝説があるのである  
(「蟬」九巻、平井訳、一一五)。

ツクツクボウシの鳴れ声を聞いて故郷に暮していふ肉親、  
友人を思ふと、田舎が熱くなってしまふのである。

### Asagumori

#### On the forest path

The leaves fall. In the withered

Grass the crickets sing

Their last songs. Through dew and dusk

I walk the paths you once walked,

My sleeves wet with memory

(The Morning Star, 一)。

朝露り

森の小道に

落葉し 枯れ

草にコオロギがうたう

辞世の歌 露と暗がりのなか

わが歩く道は君の歩いた道

わが袖は思い出に濡れ

(『心の庭』片桐訳、六二)。

ベーンもひとしづく露に思いをよせてゐる。

目に見えない世界、それ以上のものが、そのひとしづく  
の露のなかに映つてゐる。そのなかには、人間の田に見  
えない世界、無限の神秘の世界が、同じように映つてい  
るのだ。仏教は、人のようないひとしづくの露のうねり、  
魂といふ、人の世のほかの世界の象徴を見いだしてい

る (『露のひとしづく』十巻、平井訳一一五六)。

ンクスロスの詩であたらコオロギの辞世の歌が消え行く露  
と消え行くわれわれといふして違へるとがあるかと聞いか  
けてる。

Two flowers in a letter.

The moon sinks into the far off hills.

Dew drenches the bamboo grass.

I wait.

Crickets sing all night in the pine tree.

At midnight the temple bells ring.

Wild geese cry overhead.

Nothing else (*The Morning Star*, 七回).

手紙にされべば花めだい

月せむおもて三日経ぬ

竹は露しゆみ

待つてしる

いおのあは夜とおは松と鶯か

真夜中をひむの寺の鐘

雁が頭上に鳴く

ただそれだけ

(『摩利支子の愛の歌』片桐詠)。

「一」は日本の古き寺院に感銘を受けてゐる。

揺れ動く撞木で鳴られる山のような大鉦鐘、大きな鐘

根の切妻の下に群がっている龍の形、金色のやんたる

須弥壇。同じくおだ、読経と焼香とおした中國の音楽

で當まれるおおおの儀式。一すくいりおひだ、轟おと

畏怖の念ふらしみど、異様な好奇心をそそぐやうは、

なかいたやあねへ。ルスル日本に残つてゐる初  
期の寺院が、超歴人に最も深い感銘を与へる所へと  
は注目すべきである。

(「仏教の渡米」平井詠、1100—1)。

Twilight gathers in the mountain

village. Peach petals scatter

On the stream at the boom of

The evening bell. All past and

Future sounds can be heard in

A temple bell (CLP, 116).

夕ぐれがたゞいぬゑ

あふ。桃の花め

流れに るるく

入相の鐘。過抜く

来來すぐての音が聞こえる

ひむりの鐘の音

(『心の庭』片桐詠、116)。

早朝のみならず夕ぐれに聞えてくるお寺の鐘の音。一日も  
休むことなく響く、未来すぐての鐘の音を響かせるお寺の住  
職がいる。鐘は一切衆生の心の音を響かせんと、凍りつ

ケネス・ケンブロウ (KENNETH REXROTH) によるベース (LAFCADIO HEARN) の心 (田中)

ケネス・ルクベロウ (KENNETH REXROTH) ラフカディオ・ヘーン (LAFCADIO HEARN) の「(田中)

へんた冬も、暁も夏も、和風の日も、年がふ年中、う。  
焚籠を撞くのじやね。

Summer opens. A man of  
Sixty years, still wandering  
Through wooded hills, gathering  
Mushrooms, bracken fiddle necks,  
And bamboo shoots, listening  
Deep in his mind to music

Lost far off in space and time (CLP, 111-111).

夏がひまへ。六十歳

の男、こめだに

山林をわくよる、ぬりぬるのは

キノハ、ヤハヤ

タケノコ。聞かしる

虚空のかなたに消えた

じいじの奥底の音楽

(『心の庭』片桐訳、114)。

お寺かの聞えてくる鐘の音にじいじの奥底の音楽が汲み取れるのである。六十歳の男は、じいじの奥底の音楽が聞えた時、思わず手を合わせたであらう。ハーンは次の様に言

太陽も、月も、星も、大地も、空も、海も、心も、人間も、空間も、時間も、——一切のものは、影だ。影はあるわれては消えるのだ。ただ、影を造るものだけが、永遠に造るのである。

(「露のひとしゃく」平井訳、一一八)。

」の様な仏教の無常説は、ハーンの間へ如く近代科学の教理でもある (『慰藉』111111)。

だが仏教の無常觀はハーンの間へ通り、

移りがわる現象以外に、恒久としてのものをみとめず、常をみとめず、性格、階級、民族の差別といふのをみとめない仏教は、本質的にこれは許容の宗教である

(同、110-111)。

仏教は許容の宗教なのである。だから私達の言語生活の中で、鳥の声、虫の声、鐘の音、水の音、諸々の音に、逸脱の解釈が許され、それを喜びとしていたのである。そしてそれは、仏教において、万物は一なりという考え方によつて、一層生活の中に浸透して行つたのである。ハーンはこの様に言つてゐる。

ひらめき飛ぶ蜻蛉も、灰色の細いからだの浜コオロギ

も、頭の上で鳴いている蟬も、松の木の根もとで遊びに  
たわむれている赤い蟹も、すべてみな、自分の兄弟姉妹  
だと感ぜしめたのである。それは、万物は一なり、とい  
う信仰である。わたくしは、そのとれ、やよ吹く風も、  
走る波も、影のひらめかぬ、陽の搖ゆかぬ、青空も、海

も、れては陸地の万縁の静けさも、一すべりみないれ、  
われと」のものであると感じたのである。わたくしはそ  
のとれ、この世に初めなく、終りもまだなしといふこと  
を、ついぞない、まったく新しい、ふしきな考え方で  
確信した自分を発見した（「餓鬼」十巻、平井訳、一一  
〇）。

#### 引用文献 (Works Cited) ABC順

- 『アッダの真理のじぶん』中村元訳、岩波書店、一九八〇。  
『道元』上、寺田透、水野弥穂子校注、日本思想大系、岩波書店  
一九七〇。
- \* Gibson・モーガン (Gibson Morgan) 「解説」『ケネス・レク  
ベロベ心の庭・花環の山とやの他の日本の詩』片桐ユヅル  
訳、世界文庫 (一九八四)、九五—一〇一。
- Revolutionary Rexroth Poet of East-West Wisdom.*  
Conn. :Archon Books, 1986.

ケネス・レクベロ (KENNETH REXROTH) ふみふねぐーへ (LAFCADIO HEARN) の心 (田中)

Hearn Lafcadio. *The Buddhist Writings of Lafcadio Hearn.* Ed. Kenneth Rexroth. Santa Barbara: Ross-Erikson, Inc., Publishers, 1977.

*EXOTICS AND RETROSPECTIVES.* 1988. Tokyo: Yushodo Booksellers Ltd., 1982.

『仏の煙の落穂他』平井呈一訳、恒文社、一九八六。

『小泉八雲作品集』第七巻、平井呈一訳、恒文社、一九六四。  
『小泉八雲作品集』第九巻、平井呈一訳、恒文社、一九六四。  
『小泉八雲作品集』第十巻、平井呈一訳、恒文社、一九六四。  
『小泉八雲作品集』第十一巻、平井呈一訳、恒文社、一九六四。  
平井呈一『小泉八雲入門』古川書房、一九七六。

平川祐弘『小泉八雲 西洋脱出の夢』新潮社、一九八四。

犬養 孝『万葉の人ひと』PHP研究社、一九八一。

児玉実英「ケネス・レクベロによる日本古典文学 (その1) 『同志  
社女子大学学術研究年報』第二十九巻、(一九七八) 一八〇—  
一九〇一。

「ケネス・レクベロによる日本古典文学 (その2) 『同志社女子  
大学学術研究年報』第三十巻、(一九七九) 一一四—一四七。  
「レックベロの詩——シードがハサブ・ムートの時代」  
『英語青年』第二二十一巻第九号 (一九七五) 三八六—三八  
八。

ケネス・レックスロス (KENNETH REXROTH) ラウル・ヘーン (LAFCADIO HEARN) の心 (田中)

増谷文雄『友情について』講談社、一九七九。

『白文万葉集』上巻、佐々木信綱編、岩波書店、一九七七。

中山 容「トータルな人間になるための処方箋——『トノ・オーバイオグラカル・ノーベル』(一九六六)——」『星座』

別冊一号、矢立出版 (一九八二) 一一〇—一一九。

大町文衛『虫・人・自然』甲鳥書林、一九四一。

大西忠雄「小泉八雲と仏教」『眠せのハナハナ』丸一巻 (一九七五) 八五—一〇一。

Rexroth Kenneth. *The Collected Longer Poems of Kenneth Rexroth*. New York: New Directions, 1970.

『ケネス・レックスロスの庭・花園の山とその他の日本の詩』

片桐ヨヅル訳、手帖舎、一九八四。

『ケネス・レックスロス訳摩利支子の愛の歌』片桐ヨヅル訳  
復元のハナハナ、かみの道、一九七八。

THE MORNING STAR. New York: New Directions, 1979.

New Poems. New York: New Directions, 1974.

ONE HUNDRED POEMS FROM THE JAPANESE.

New York: New Directions, 1964.

坂本幸男『弘法院の知慧—華厳経譜語—』半蔵書店、一九六七。

高木大幹『小泉八雲と日本の心』古川書房、一九八一。

『小泉八雲 その日本学』リプロポーク、一九八六。

谷川徹三『東洋と西洋』岩波書店、一九四一。

田代三千穂『アメリカの作家たち／ハーンの世界』英華社、一九八一。

竹内道雄『道元』吉川弘文館、一九八一。

矢口以文「ケネス・レックスロスの詩の世界」『星座』別冊一号、矢立出版 (一九八二) 四〇—四九。

九